

西屋城の合戦①

国道一七九号を北上し、奥津地域の西屋橋を渡る時、眼前に富士山のような形に見える山がそびえています。これが中世の山城「西屋城」の跡で、山頂付近には南北約三〇m、東西約一五mの主郭を中心に南北にのびる尾根と、東側に隣接する尾根上に、曲輪や堀切、竪堀などが配置されています。



西屋城跡（西屋）



佐良山城跡（津山市加茂町公郷）

築城の時期は不明ですが、苦田ダム周辺にある山城跡が発掘調査によって南北朝～室町時代に使用されていたと推定されている中で、これらよりも大きな規模を誇る西屋城は、後述する記録や伝承等もふまえ、苦

田ダム周辺の諸城よりも少し時代が下る戦国～安土・桃山時代頃にそのピークを迎えていると思われます。城主は、江戸時代にまとめられた書物の中では、津山森藩の動向を記録した「森家先代実録」（一八〇九）の中にある「美作国古城并城主之覚」には川端丹後、『作陽誌』（一六九一）には川端周防、斎藤玄蕃、苔口惣（宗）十郎らが代々居城としていたとあり、「美作鏡」（一八五二）には川端丹後、のち苔口宗十郎・斎藤玄蕃とされています。川端丹後は、備前の浦上家に仕え、後に宇喜多家の家臣となり、佐良

山城や室尾城（いずれも津山市）の城主なども務めていた武将です。川端周防は丹後と同一人物か一族の者と思われる。苔口宗十郎も、宇喜多家の重臣で美作攻略を担当した花房助兵衛の下に属し、院庄の合戦や神楽尾城（津山市）攻略等で数々の武功を上げた武将です。斎藤玄蕃は、小田草城（馬場）を本拠地とし、初めは安芸（広島県）の毛利家に属し、後に宇喜多家の家臣となる斎藤近実（ちかざね）のことです。これらの記録から、西屋城は特定の国人（地侍）の本拠地として築城されたわけではなさそうですが、安土・桃山時代頃には宇喜多家の支配する城として、美作地域に拠点を置く武将が次々と城主を務めていたことがわかります。当時の津山市及び鏡野町域は、宇喜多と毛利両家の勢力が混在し、攻防の争点となっており、津山盆地と山陰の伯耆国を結ぶ要衝にある西屋城は、戦略上重要な場所であったことがうかがわれます。

元龜三年（一五七二）の小早川隆景（毛利元就の三男）の書状の中に、毛利方の武田高信が佐治（鳥取市）に出陣した際、作州西屋表で応戦したと書かれているものがあるの

備えていたことがわかります。しかし、その後宇喜多と毛利は手を結び、両家の争いは一時的に治まるものの、天正七年（一五七九）には宇喜多が織田信長に服属し、毛利と手を切ると鏡野町域での争乱は再び激化します。この頃、苔口宗十郎と共に花房助兵衛の下で美作攻略に従事していた小嶋次郎兵衛という人物の書状には

くたの西やと申す山城手前二、敵の城式ツ三ツ御座候を御ふ（踏み越）して、西屋を御とりて加番入れ置き、則苔口宗十郎を大將分にて罷り在り候（以下略）と書かれています。この書状からわかることは、宇喜多方が毛利方の守る近隣の諸城を落城させ、西屋城を奪い、苔口宗十郎を大將にして城の守備に当たさせたということ、つまりこの直前まで西屋城が毛利方の城であったということで、記録の残らない空白の期間に西屋城は毛利方の支配下となっていたことを示しており、この時期の美作の勢力図の複雑さを如実に物語っています。

鏡野町教育委員会 生涯学習課 日下
電話(0868)547733

参考：『奥津町史』『岡山県中世城館跡総合調査報告書』『美作国の山城』『作陽誌』『岡山県史』『岡山県歴史人物事典』『萩藩閥閥録』